

日本人既婚者における自己の性的イメージと 配偶者および子に対する接触回避との関係

Correlations between Sexual Self-Images in Japanese Married
Persons and Contact Avoidance toward their Spouses and Children

河野和明*, 羽成隆司**, 伊藤君男*

Kazuaki KAWANO, Takashi HANARI, Kimio ITO

キーワード：性的自己イメージ, 浮気, 配偶者と子に対する接触回避

Key words: sexual self-image, infidelity, contact avoidance toward spouse and children

要約

性的自己イメージが配偶者および子に対する接触回避とどのような関係があるかを検討するため、20代から60代の各年齢層の既婚男女（調査1）および0-18歳の子をもつ親（調査2）にWEB調査を実施した。2種の性的自己イメージとともに、調査1は配偶者、調査2は自身の子に対する接触回避を測定した。重回帰分析の結果、男性においては、配偶者に対する接触回避について、配偶者に対する愛情を統制した後も「浮気者イメージ」が有意に予測した。女性は、浮気者イメージと接触回避の関係が有意傾向であった。同様に、子に対する接触回避については、男性において、子への肯定的感情を統制した後も浮気者イメージが有意に予測した。女性の浮気者イメージは有意傾向であった。「好色イメージ」はいずれの性においても、配偶者および子に対する接触回避と有意な相関を示さなかった。これらのことから、男性において、浮気者イメージが強いほど配偶者と子に対する接触回避が高いことが明らかになった。女性も同様の傾向が見られたが、これらの関係は男性に比べ明瞭ではなかった。これらの結果は、多数の配偶者を求める戦略が、特に男性において現在の配偶者および子に対する潜在的な回避傾向を生じさせていることを示唆する。

Abstract

This study aimed to investigate how sexual self-image is related to contact avoidance toward spouse and children. Web-based surveys were administered to married men and women aged between 20 and 69 (survey 1), and to parents who had at least one child aged from 0 to

18 (survey 2) . Along with two types of sexual self-image, Survey 1 measured contact avoidance toward the spouse, and Survey 2 measured contact avoidance toward children. Multiple regression analysis revealed that a male self-image of infidelity significantly predicted contact avoidance toward the spouse positively, even after controlling for marital love. For females, infidelity image predicted contact avoidance with significant trend. Similarly, for contact avoidance toward children, a self-image of infidelity showed a positive and significant relationship in males, even after controlling for positive affection toward children. The relationship between self-image of infidelity and contact avoidance with children had a significant trend in females. A self-image of sensuality had no significant correlation with contact avoidance toward spouse or children in either sex. These results indicate that the stronger the self-image of infidelity, the higher the avoidance of contact with spouse and children in males. A similar trend was observed for females, but the relationships were less clear than for males. These findings suggest that the sexual strategy of seeking multiple spouses generates a potential avoidance tendency toward the current spouse and children, especially among males.

問題

嫌悪は、嫌悪対象に対する拒否と回避の機能をもつ感情と考えられる (Rozin et al., 1999)。人は嫌悪感をもつことによって、病原体、望ましくない性的関係、道徳的逸脱、一般的な対人関係を含むさまざまな潜在的な脅威を回避し、これらによって広義のコストを負うことを防止している (Tybur et al., 2013)。この時、行動免疫理論 (behavioral immune system; Schaller, 2011; 岩佐, 2019) でいう機能的柔軟性原理 (functional flexibility principle) が示唆するように、対人関係についても、個人が採る対人的戦略に応じて一部の嫌悪感が繊細に調整されている可能性がある。

タッチ回避傾向 (touch avoidance; Andersen & Leibowitz, 1978; Ozolins & Sandberg, 2009) や接触回避 (Kawano et al., 2011) など、接触に対する嫌悪感や回避傾向は、対象者の性 (Andersen, 2004) や恋愛感情 (河野ら, 2015) によって変化することが知られている。また、接触に対する認知が性格特性の協調性と関連するといった知見 (Dorros et al., 2008) から、接触に関する感情や認知は、性的関係を含む社会的関係調整の背景となっていると考えられる。したがって、対人関係に対する個人の一定の志向性あるいは戦略がこれらに反映される可能性がある。

前報において河野ら (2022) は、日本人既婚者を対象として、自己の性的イメージを「好色イメージ」と「浮気者イメージ」に分類してそれぞれ測定した。そして、これらの年齢変化や、性

的活動に関する他の変数との相関の特徴から、前者が性的欲求の強度、後者が多数の配偶者を求める潜在的な戦略をそれぞれ反映していることが示唆された。本研究はこの知見を前提に、自己の性的イメージと、親密な他者である自身の配偶者と子に対する接触回避との関係を明らかにするものである。

浮気者イメージが多数の配偶者を求める志向性を反映するなら、このイメージが高い個人は、新たな配偶関係に備え、自身の現在の配偶者や子に対する潜在的な回避傾向を高めている可能性がある。この時、多数の配偶者を求める戦略は一般的に男性が採りやすい (Buss & Schmitt, 1993; Schmitt, 2005) ので、この傾向は男性に顕著となると予想される。

以上から、本研究では以下の3点の検討を目的とする。すなわち、(1) 自己についての性的イメージ、特に浮気者イメージが配偶者に対する接触回避と関連するか、(2) 同様に、自身の子に対する接触回避と関連するか、(3) これらに性差がみられるか、である。

調査1

調査1では、既婚者の性的イメージと配偶者に対する接触回避との関連を検討するため、前報 (河野ら, 2022) のデータを再分析し、回答者自身の性的イメージと配偶者に対する接触回避の関係を検討する。配偶者に対する接触回避は配偶者に対する愛情と負の相関をもつので、重回帰分析によって愛情の影響を統制した上で、性的イメージと接触回避がどの程度の関係を示すかを明らかにする。

方法

調査参加者：調査はインターネット調査会社 (株式会社マクロミル) に委託し WEB 上で実施された。調査対象者は 20 代から 60 代の各年齢層の既婚男女 103 名ずつから構成され、計 1030 名 (男性 515 名, 女性 515 名) の回答が収集された (男女は独立したサンプルであり、同一夫婦の夫と妻ではなかった)。平均年齢は、男性 45.20 歳 (SD=13.53), 女性 44.69 歳 (SD=13.55) であった。

質問項目：本報告では以下の項目を分析の対象とした。なお、性行動に関連する変数等も測定したが、本報告では言及しない。それらについては、前報 (河野ら, 2022) を参照されたい。

- (1) **回答者の年齢：**回答者自身の年齢について、具体的な数値を尋ねた。
- (2) **配偶者に対する接触回避：**配偶者に対する接触回避の程度を接触回避尺度 (Kawano et al., 2011; 河野ら, 2013; 8 項目, 7 件法) によって測定した。8 項目の合計を接触回避得点とした。
- (3) **配偶者に対する愛情：**菅原・詫摩が開発した Marital Love Scale (菅原・詫摩, 1997; 詫摩ら, 1999) を用いた (15 項目, 5 件法)。合計得点を配偶者に対する愛情とした。

(4) 回答者自身についての性的イメージ: 性的な形容語 14 項目を呈示し, これに対する回答者自身についての評定を 5 件法 (1 = まったく当てはまらない ~ 5 = 非常に当てはまる) で求めた。これらは「好色イメージ」5 項目 (「エッチな」, 「性的な」, 「好色な」, 「性的にイチャついた」, 「官能的な」; 河野ら, 2022, $\alpha = .89$), 「浮気者イメージ」4 項目 (「乱交的な」, 「性的にだらしない」, 「不倫好きな」, 「浮気な」; 同 $\alpha = .89$) に分類された。それぞれの合計得点を算出して分析に用いた。

倫理的配慮

本研究は東海学園大学研究倫理委員会の承認を得た (受付番号 2021-17)。調査協力者は研究参加および結果の公表について同意の上で自発的に調査に参加していた。

結果と考察

接触回避の性差分析 配偶者に対する接触回避得点の平均値は, 男性回答者 12.84 ($SD = 8.59$), 女性 16.81 ($SD = 11.09$) であり, 女性が有意に高かった ($t(967.50) = -6.43, p < .01$, Cohen's $d = -0.400$)。これは, 女性は異性に対して一般に高い接触回避を示すとする従来の知見に一致する。なお, 配偶者に対する愛情や性的イメージの性差については前報 (河野ら, 2022) を参照されたい。

相関分析 性ごとに, 配偶者に対する接触回避, 回答者の年齢, 配偶者に対する愛情, 好色イメージおよび浮気者イメージの相関係数行列を示す (Table 1)。

Table 1. 配偶者に対する接触回避, 回答者の年齢, 配偶者に対する愛情, 回答者自身についての好色イメージ, 回答者自身についての浮気者イメージの相関係数行列

変数	1	2	3	4	5
1.配偶者に対する接触回避		.24**	-.60**	-.06	.13**
2.回答者の年齢	.05		-.10*	-.20**	-.10*
3.配偶者に対する愛情	-.37**	-.05		.11*	-.13**
4.好色イメージ	.07	-.12**	.01		.68**
5.浮気者イメージ	.25**	-.07	-.20**	.59**	

左下は男性回答者 (n=515), 右上は女性回答者 (n=515)

* $p < .05$, ** $p < .01$

男性の接触回避は, 愛情と負の, 浮気者イメージと正の有意な相関を示した。一方女性は, 愛情と負の, 年齢および浮気者イメージと正の有意な相関を示した。男性も女性も, 愛情が高いと配偶者への接触回避が低く, 自己の浮気者イメージが強いと接触回避が高いことが示された。女性は年齢に応じて配偶者への接触回避を高めていた。配偶者に対する愛情は, 男性では好色イ

イメージと相関が見られず、浮気者イメージと有意な負の相関が見られたが、女性では好色イメージと弱い正の、浮気者イメージと負の有意な相関が示された。

重回帰分析 続いて、配偶者に対する愛情、回答者の年齢、好色イメージおよび浮気者イメージを予測変数とし、接触回避得点を従属変数として重回帰分析を行った。男性の接触回避は愛情と浮気者イメージが有意に予測した (Table 2 上)。その一方、好色イメージに有意な関係はみられなかった。女性は、愛情、回答者の年齢が接触回避を有意に、浮気者イメージは有意傾向で予測したが、男性同様、好色イメージに有意な関係はみられなかった (Table 2 下)。

Table 2. 男性回答者 (上) および女性回答者 (下) において、配偶者に対する接触回避得点を従属変数とし、配偶者に対する愛情、回答者の年齢、回答者自身についての好色イメージ、回答者自身についての浮気者イメージを予測変数とした重回帰分析の結果 (強制投入法).

	β	t	p
配偶者に対する愛情	-.325	-7.782	.000
回答者の年齢	.044	1.092	.275
好色イメージ	-.049	-0.961	.337
浮気者イメージ	.217	4.201	.000
配偶者に対する愛情	-.570	-15.763	.000
回答者の年齢	.183	5.191	.000
好色イメージ	-.020	-0.415	.678
浮気者イメージ	.084	1.708	.088

男性では、重回帰モデルにおいて愛情の影響を統制した後も、浮気者イメージが配偶者に対する接触回避を有意に高めていることが示された。一方、女性においても、浮気者イメージが接触回避をある程度高める傾向がうかがわれたが、有意傾向にとどまった。したがって、男性に比べてこの相関は明瞭でないと言える。さらに女性においては、年齢が配偶者に対する接触回避を高める要因となることが示された。

調査2

調査1では、回答者の性的自己イメージと配偶者に対する接触回避の関係を見た。続く調査2では、同様に既婚者の性的自己イメージと自分の子に対する接触回避の関係を検討する。その際には、子に対する肯定的感情および子にかけている広義のコストも同時に測定する。そして、特に子に対する肯定的感情の影響を統制した上で、性的イメージと接触回避にどの程度の関連があるかを明らかにする。

方法

調査参加者 クラウドソーシング会社 (クラウドワークス社) の登録者に対し、有償でアンケー

ト調査の回答者を募集した。すべての手続きはWEB上で行われた。子供の年齢を6カテゴリ(0-3歳, 4-6歳, 7-9歳, 10-12歳, 13-15歳, 16-18歳)に分け, 各年齢の子をもつ男女100名ずつを募集して, 0歳から18歳までの子をもつ親からの回答を収集した。評定対象となる子ども(以下, 対象児)の年齢, 性別, 実子か否かを尋ねた上で実子に限定し, さらに不備のある回答を除いたところ902名(男性363名, 女性539名)分の有効回答を得た。平均年齢は, 男性42.00歳(SD=7.47), 女性38.72歳(SD=6.87)であった。対象児は, 男児462名, 女児440名(平均年齢9.16歳, SD=5.38)となった。

質問項目

調査では以下の質問に対する回答を求めた。これら以外にも子に対する認知関連項目等も投入したが, 本研究では言及しない。各項目は設問内において回答者ごとにランダムな順序で呈示した。

(1) **回答者の年齢**: 回答者自身の年齢について, 具体的な数値を尋ねた。

(2) **対象児に対する接触回避**: 調査1と同様, 接触回避尺度を投入し, 対象児について7件法による回答を求めた。なお, 対象児が幼すぎて項目文の状況がありえないといったような場合も, ひとまず可能だと想定して回答するよう要請した。

(3) **対象児に対する肯定的感情**: 8項目(「かわいらしさ」「愛情」「嫌悪感」「子育てのよろこび」「ストレス感」「憎たらしさ」「負担感」「責任感」)を7件法(1=まったく感じない~7=非常に感じる)で取得した。本報告では, 肯定的な内容である4項目(「かわいらしさ」「愛情」「子育てのよろこび」「責任感」)の評定値合計を算出し, 対象児に対する肯定的感情とした($\alpha=.92$)。

(4) **育児にかかる広義のコスト**: 育児にどの程度コストをかけているかを測定するために, 以下の3種の質問を設定した。①**育児費用**: 対象児の養育や教育にかけている1ヶ月あたりのおおよその金額を10カテゴリ(1=5,000円未満, 2=5,000円~1万円, 3=1~2万円, 4=2~3万円, 5=3~5万円, 6=5~7万円, 7=7~10万円, 8=10~15万円, 9=15~20万円, 10=20万円以上)から選択するよう要請した。分析では, 各カテゴリの金額レンジの中央値に置き換えた(例, 「5,000円~1万円」は7,500円; なお, 5,000円未満は2,500円とし, 20万円以上については, 子供一人に掛ける費用は1ヵ月50万円程度が最大と推定し, 20万円以上50万円の中央である350,000円とした)。②**子育て労力評定**: 対象児の養育にかけている自分自身の労力の評定を全労力に対する%で取得した。③**育児時間**: 対象児の養育にかけている自分自身のおおよその時間(1日あたり; 1=30分以下, 2=30分~1時間, 3=1時間~1時間半, 4=1時間半~2時間, 5=2~3時間, 6以降は1時間間隔で, 21=18時間以上)から選択するよう要請した。分析は各カテゴリの時間レンジの中央値に置き換えた(例, 「1時間~1時間半」は1.25時間; なお, 30分以下は0.25時間, 18時間以上は18時間とした)。

(5)回答者自身についての性的イメージ：調査1と同様に「好色イメージ」5項目と「浮気者イメージ」4項目を用いた。

倫理的配慮

本研究は東海学園大学研究倫理委員会の承認を得た（受付番号 2022-3）。調査協力者は研究参加および結果の公表について同意の上で自発的に調査に参加していた。

結果と考察

接触回避の性差分析 対象児に対する男性回答者の接触回避得点の平均値は、男児について 12.74 ($SD = 7.40$)、女児について 12.14 ($SD = 7.85$) であった。一方、女性回答者は、男児について 12.11 ($SD = 6.99$)、女児について 11.58 ($SD = 6.51$) であった。回答者の性（男性・女性）×対象児の性（男児・女児）の2要因分散分析を行ったところ、交互作用および主効果は認められなかった。これは、大学生における同年代に対する回避（Kawano et al., 2011；河野ら, 2015）および両親に対する回避（羽成ら, 2022）の性差特性とは異なっていた。

相関分析 性ごとに、対象児に対する接触回避、回答者の年齢、対象児に対する肯定的感情、育児費用、子育て労力評定、育児時間、好色イメージおよび浮気者イメージの相関係数行列を示す（Table 3）。

Table 3. 対象児に対する接触回避、回答者の年齢、対象児に対する肯定的感情、育児費用、子育て労力評定、育児時間、回答者自身についての好色イメージ、回答者自身についての浮気者イメージの相関係数行列

変数	1	2	3	4	5	6	7	8
1.対象児に対する接触回避		.12**	-.30**	.19**	-.10*	-.07	.01	.13**
2.回答者の年齢	.02		-.15**	.27**	-.19**	-.45**	-.17**	.00
3.対象児に対する肯定的感情	-.39**	-.02		-.08	.26**	.17**	-.08	-.26**
4.育児費用	.10	.03	-.04		.06	-.11**	-.06	.03
5.子育て労力評定	.03	-.21**	.22**	.12*		.00	-.02	-.07
6.育児時間	-.04	-.24**	.20**	.06	.38**		.05	-.05
7.好色イメージ	.05	-.05	.02	-.07	-.06	.14**		.69**
8.浮気者イメージ	.19**	-.03	-.21**	-.01	-.03	.05	.65**	

左下は男性回答者（n=363）、右上は女性回答者（n=539）

* $p < .05$, ** $p < .01$

対象児に対する男性の接触回避は、対象児に対する肯定的感情と負の、浮気者イメージと正の有意な相関を示した。対象児にかけているコストはいずれも有意な相関を示さなかった。子に対

して良い感情をもっていればその子に対する回避傾向は低いですが、浮気者イメージが高いと回避が高いことが示された。女性の接触回避は、女性の年齢、育児費用、浮気者イメージと正の、対象児に対する肯定的感情および労力評定と負の、有意な相関を示した。ここでも、子に対して良い感情をもっていれば、また、労力をかけていればその子に対する回避傾向は低いですが、浮気者イメージ、年齢、育児費用がそれぞれ高いと回避も高いことが示された。育児費用が高いと回避が高い傾向については、身体接触への抵抗感が強いと託児などに費用をかけがちになるといった可能性も考えられるが、現段階では単純な解釈は難しい。

一方、浮気者イメージは男性においても女性においても対象児に対する肯定的感情と有意な負の相関があり、浮気者イメージが強い親は対象児に対する愛情が低い傾向があると言える。その反面、浮気者イメージは3種の育児コストと有意な相関を示さず、この自己イメージが強いからといって実際の子育てコストを抑制しているわけではないと言える。

重回帰分析 続いて、対象児に対する肯定的感情、回答者の年齢、好色イメージおよび浮気者イメージを予測変数とし、対象児に対する接触回避得点を従属変数として重回帰分析を行った。育児コストについては、特に女性回答者の単相関の様相から解釈が多義的になる可能性があるため変数から除外した。重回帰分析の結果を Table 4 に示す。男性の接触回避は肯定的感情と浮気者イメージのみが有意に予測した。女性は、肯定的感情のみが有意に予測し、年齢と浮気者イメージの影響が有意傾向であった。

Table 4. 男性回答者(上)および女性回答者(下)において、対象児に対する接触回避得点を従属変数とし、対象児に対する肯定的感情、回答者の年齢、回答者自身についての好色イメージ、回答者自身についての浮気者イメージを予測変数とした重回帰分析の結果(強制投入法).

	β	t	p
対象児に対する肯定的感情	-.356	-7.029	.000
回答者の年齢	.011	0.235	.814
好色イメージ	-.033	-0.502	.616
浮気者イメージ	.136	2.046	.042
対象児に対する肯定的感情	-.263	-6.063	.000
回答者の年齢	.071	1.664	.097
好色イメージ	-.068	-1.156	.248
浮気者イメージ	.106	1.778	.076

このことから、男性は子への肯定的感情を統制した後も浮気者イメージが子に対する接触回避を増大させることが示された。また、女性にも同様の傾向が見られたが、男性に比べ影響は明瞭ではなかった。

総合的考察

本研究では、日本人既婚者について調査し、自己の性的イメージと、自身の配偶者と子に対する接触回避との関係を検討した。その結果、問題で掲げた3点について、以下のように結論づけられる。すなわち、(1)自己についての浮気者イメージは配偶者に対する高い接触回避と関係し、(2)同様に自己についての浮気者イメージは自身の子に対する高い接触回避とも関連するが、(3)重回帰分析から、対象者に対する肯定的感情を統制した上でも浮気者イメージと接触回避は男女とも一定の関係を示し、相対的にこの傾向が明瞭なのは男性であった。なお、ここで測定した接触回避は、一般的なタッチ回避傾向 (touch avoidance; Andersen & Leibowitz, 1978 など) と異なり、対象人物の身体生産物 (排泄物など) への接触可能性も含む、より広範で深い接触に対する嫌悪を測定していることに注意が必要である。

なお、浮気者イメージが高いと、男女とも、配偶者に対しても子に対しても肯定的感情が低かった。これは、ソシオセクシャリティ (sociosexuality; Simpson & Gangestad, 1991) は配偶者との関係満足度と負の相関を示す (仲嶺・古村, 2016) といった知見から、予想されることである。本研究では、この肯定的感情を統制した後も浮気者イメージが接触回避を高めることが示された。このことは、配偶者以外の性的パートナーをより強く求める個人は配偶者への広義の投資を手控える傾向を内在させており、それは愛情の少なさだけでなく、より積極的な回避傾向となって現れるものと考えられる。

ただし、男性も女性も、浮気者イメージは子にかかるコスト3種と相関を示さないので、少なくとも主観評価の範囲では高浮気者イメージ者が子に対する実際の投資を抑制しているわけではない。つまり、表面的な子育ての費用・労力という点では、浮気者イメージ者は手を抜いてはいない。いわば、あくまでもポテンシャルとして子に対する回避的な傾向を内在させているものと推定される。

一方、一般的な性的欲求に対応すると考えられる「好色イメージ」は、単相関でも重回帰分析においても、配偶者および子に対する接触回避と相関関係がなかった。このことから、全般的な性的欲求では配偶者および子に対する接触回避は説明されず、性的な対象が配偶者以外に向かう志向性が特異的にこれらの回避傾向を高めているものと推定される。

多数の配偶者を求める戦略を採る個人は、すでにいる配偶者や子に対してだけでなく、必然的に他の異性との関係へ資源投下を企図することになる。現在の配偶者や子に対する接触回避は、限られた心理社会的資源をその個人にとって重要な潜在的対象に投下するため、競合する対象への投資を節約する背景的感情なのだろう。これは実際の子育てコストといった表面的な部分には現れにくい、個人の配偶戦略とセットになって、資源の配分調整の方向性を誘導している可能性がある。

本研究の知見を踏まえ、今後は、接触回避を手がかりとして個人の性戦略の影響をさらに検討することが課題となろう。たとえば、年齢は繁殖成功に関わる重要な要因なので、自己、配偶者、子のそれぞれの年齢に応じた接触回避の変化は検討に値するだろう。また、社会経済的な広義の資源量や生活史戦略（杉山・高橋，2015）との関連も検討課題となり得る。これらが解明されることで、感情に反映される対人的な適応メカニズムがいつそう明らかになっていくことが期待される。

本研究は JSPS 科研費 26590135 の助成を受けた。

引用文献

- 岩佐和典，2019. 行動免疫からみた特定集団への否定的態度. エモーション・スタディーズ, 4, Si, 47-53.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男，2013. 「接触回避尺度」開発の試み. 東海学園大学紀要, 18, 155-161.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男，2015. 恋愛対象者に対する接触回避. パーソナリティ研究, 24, 95-101.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男，2022. 日本人既婚者における自己の性的イメージの年齢変化. 東海学園大学紀要, 27, 1-11.
- 菅原ますみ・詫摩紀子，1997. 夫婦間の親密性の評価－日記入式夫婦関係尺度について－. 精神科診断学, 8, 155-166.
- 杉山宙・高橋翠，2015. 生活史理論のヒト発達への拡張－個人差とその発達に対する新たな視点－. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 55, 247-259.
- 詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介 他，1999. 夫・妻の抑うつ状態に影響を及ぼす夫婦間の愛情関係について. 性格心理学研究, 7, 100-101.
- 仲嶺真・古村健太郎，2016. ソシオセクシャリティを測る：SOI-R の邦訳. 心理学研究, 87, 524-534.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男，2022. 青年期男女における両親およびきょうだいに対する接触回避. 椋山女学園大学研究論集, 53, 1-7.
- Andersen, P. A., 2004. The Touch Avoidance Measure. In: V. Manusov (Ed.), *The sourcebook of nonverbal measures* (pp.57-65). New York: Psychology Press.
- Andersen, P. A., Leibowitz, K., 1978. The development and nature of the construct touch avoidance. *Environmental Psychology and Nonverbal Behavior*, 3, 89-106.
- Buss, D. M., Schmitt, D. P., 1993. Sexual strategies theory: An evolutionary perspective on human mating. *Psychological Review*, 100, 204-232.
- Dorros, S., Hanzal, A., Segrin, C., 2008. The Big Five personality traits and perceptions of touch to intimate and nonintimate body regions. *Journal of Research in Personality*, 42, 1067-1073.
- Kawano, K., Hanari, T., Ito, K., 2011. Contact avoidance toward people with stigmatized attributes: Mate choice. *Psychological Reports*, 109, 639-648.

- Ozolins, A., Sandberg, C., 2009. Development of a multifactor scale measuring the psychological dimensions of touch avoidance. *International Journal of Psychology: A Biopsychosocial Approach / Tarptautinis psichologijos žurnalas: Biopsichosocialinis požiūris*. 3, 33-56.
- Rozin, P., Haidt, J., McCauley, C. R., 1999. Disgust. In: David Levinson, James J. Ponzetti, Jr., & Peter F. Jorgensen (eds.), *Encyclopedia of Human Emotions* (pp.188-193). New York: MacMillan.
- Schaller, M., 2011. The behavioural immune system and the psychology of human sociality. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London B: Biological Sciences*. 366, 3418-3426.
- Schmitt, D. P., 2005. Sociosexuality from Argentina to Zimbabwe: A 48-nation study of sex, culture, and strategies of human mating. *Behavioral and Brain Sciences*. 28, 247-311.
- Simpson, J. A., Gangestad, S. W., 1991. Individual differences in sociosexuality: evidence for convergent and discriminant validity. *Journal of Personality and Social Psychology*. 60, 870-883.
- Tybur, J. M., Lieberman, D., Kurzban, R. et al., 2013. Disgust: Evolved function and structure. *Psychological Review*. 120, 65-84.